




審査結果の要旨

報告番号	(乙) 第 2777 号	氏名	白土 一太郎
審査担当者	主査	矢野 博久	
	副主査	緒方 裕	
	副主査	鶴田 修	
主論文題目： Expression of IGF-1 and IGF-1R and Their Relationship to Clinicopathological Factors in Colorectal Cancer (大腸癌における insulin-like growth factor 発現の意義)			

審査結果の要旨 (意見)

本研究では、多機能ペプチドホルモンである insulin-like growth factor (IGF)-1 とそのレセプターである IGF-1R の大腸癌組織における発現を 210 症例という多数症例を用いて検討し、更にその臨床病理学的意義を詳細に検討し興味深い結果を得ている。IGF-1 は大腸癌症例の 80% で発現しており、IGF-1R は 66% で発現していた。単変量解析では、IGF-1 と IGF-1R の発現は、いずれも腫瘍径及び腫瘍深達度と有意に関連しており、IGF-1 の発現は、更に、脈管侵襲とも有意に関連していた。多変量解析では、IGF-1 の発現は腫瘍径と深達度と有意に関連していたが、IGF-1R では腫瘍径と関連する傾向が見られるのみであった。これらの事実から、IGF-1/IGF-1R 系は大腸癌の発癌初期よりも、腫瘍径が増大し深部に浸潤するより後期の現象に関連性が深いことが示唆された。進行大腸癌症例に対する分子標的としても将来的に有効である可能性も合わせて示しており、学位論文として極めて価値の高いものであると判断する。

論文要旨

今回 IGF-1 及び IGF-1R 発現の意義を免疫組織化学的染色にて検討した。2002 年 1 月～2004 年 12 月に治癒切除が施行された大腸癌 210 例を調査した。IGF-1 発現と臨床病理学的因子の比較では、腫瘍径、深達度、リンパ管及び静脈侵襲で関連があった。リンパ節転移や再発率に関しては有意な関連性は認めなかった。Logistic 回帰分析では IGF-1 発現と関連する因子は腫瘍径と深達度のみであった。IGF-1R では、腫瘍径と深達度のみが関連していた。IGF-1R 発現においても、再発率やリンパ節転移と明らかな関連は認められなかった。IGF-1R 発現と腫瘍径と深達度にて Logistic 回帰分析を行うと、腫瘍径のみが関連していた。IGF-1 及び IGF-1R の発現は腫瘍の悪性度との関連性は認めなかった。癌の転移、進展には、他の様々な遺伝子異常やケミカルメディエーターが関与しており、IGF はその一部を担っているに過ぎないと考えられる。IGF-1 及び IGF-1R の発現が共に腫瘍径に関して関連性を示したことは、IGF-1 が大腸癌の増殖に必要な因子である可能性が示唆された。